

「ソフテックス社」創業者の小泉菊太さんをしのぶ（1988.3.10）

手作りの軟X線

執筆当時：東京農業大学 成岡 市
（元製造部勤務）

軟X線についてまだ初心者の私ですが、それにもかかわらず、本間義男相談役から若者なりの思いで良いから一言添えるようにと命ぜられてしまいました。会長は情熱的な研究姿勢とそのお人柄ゆえ、大勢のお知り合いがいらっしゃいますので、その方々から万感こもるメッセージが送られるでありましょうから、私は気軽な気持ちで書かせていただくことにいたします。

私の父は、以前、渋谷道玄坂でどじょう料理屋の板前をしておりましたが、会長はその店の馴染のお客様でした。毎年夏の暑い日になると、会長はきまって奥様と大きな西瓜をおみやげにぶら下げてやって来て、お二人で柳川鍋を美味しそうにつづいていたそうです。そのご縁で私はソフテックス社に初めての就職をしました。十年ほど前のこととなります。

面接を受けに、日本発明振興会館に移転後の本社に行きましたところ、会長（当時社長）は入口からも社員からもよく見えるフロアー正面に陣取っていたようです。実は、そこに座っている方が社長であると気づくまでに少しばかり時間がかかりました。正直を言いますと、その風貌が「社長」というよりも、ほとんど人のよい「職工」さんに見えたからです。ご立腹の方があれば、平にお許し下さい。「X線」と聞けば、やはり医療関係の情景がピンときますので、さぞかしスマートな会社なんだろうと予想していたのです。

現在では、海老名の工場は最新設備になっており、「こうば」と呼ばずに「こうじょう」といい、社員であるところの職工さんを「エンジニア」といい、社内研修も充分に行なわれています。しかし、私が面接直後に配属された当時の工場は、外見上明らかに典型的な中小企業そのものでした。すぐに在庫管理に回されました。現場から「スイッチを発注してくれ」と連絡を受けると、「ハイ分かりました」とパブロフの条件反射のごとく応えるのは早いのですが、何をどこに注文しているのか分かりません。あちこち走り回り、カタログを照らし合わせて、どの部品かがようやく分かったのも束の間、電話を掛けた先はメーカーの本社でした。「代理店」というのがあることに気がついたのはその時です。その半年後には、工場の人手が足りず、私がタテヨコの線を描けるという理由で、設計に配置替えとなりましたが、そこでも目から火が出るような思いを繰り返したのを覚えています。大手企業は沢山の専門家が揃って分担でこなしているようですが、我が職場は一人が何でもこなさなければなりません。「責任」は我が辞書にないと口をとがらせて言うことしばしばですが、実は重大な責任がかかっていると気が付くのは、帰宅前の赤ちょうちんに入ったときです。翌朝極度の二日酔いをこらえながら揺れる電車の手すりにもたれてい

ると、「ああこのメッキを使おう。」とか、「この止め金はいい。」と、充血した目をこすって、ほとんど職業病であります。社長の節くれ立った手から初めてボーナスをいただいたときは、たとえ貿易不均衡がなぜこのようなところに来るのかというようなはかない疑問を持ったとしても、一瞬でも感激にひたるのであります。

会長が70年もの長い間、エンジニアとして、企業経営者として、「軟X線管球」作りにひたすら取り組み続けてこられたパワーは、いったいどこから出ていたのでしょうか。使命感からか、挫折からか、あるいは運命からか。ときには「どぜう料理」だったか(?)。

会長が小学校卒業と同時にリンデマン・ガラス管作りの仕事に入った頃は、徒弟制度の厳しい時代であり、現在のように学校や大手企業で微に入り細に入り懇切丁寧に教育を受ける時代とは様子が異なっていたとよく聞かされました。私ども若輩には、想像の世界です。しかし、現在の軟X線管球(ベリリウム窓付きクーリッジ管)を完成させた裏には、その修行時代の結実と、熱心な科学者との出会いがあったとも聞いております。一流のエンジニアと名乗れるには、人から見えない計り知れない労苦があること、しかも改良(向上)と製品化(応用)を望むには、より熱心な研究が必要なことを、会長は私どもに身を持って伝えようとしていたように思います。そうした会長のエンジニアとしての自信と信念があったからこそ、また手作りの軟X線発生装置が鉛や高圧絶縁オイルにまみれたエンジニア達によって造られていたからこそ、専門メーカーとしての今があるのだと思うのは私の思い違いでありましょうか。

一時代を築いた炎が一つ消えてしまいました。しかし、見えない光を使って未知の世界を開拓したいと熱望する多くの若いエンジニア達が後に続いています。

いまは亡き小泉菊太会長のご冥福を祈りつつ、追悼の文といたします。